

# 平成州紙



## おりおりの記

大学を卒業してから半世紀近く経った今、学生時代を懐かしく思い出すことがある。

当時、母校の校舎は二箇所、お城に隣接する教育学部の傍らを走る路面電車で15分ほど乗ると木造三階建ての校舎に到着。経済学部の階段教室で学んだ…など。

二年前、図らずも後援会会長兼学長アドバイザー役が回ってきた。母校は現在、四学部となって市内中心部から郊外の小高い丘に移り、新たに出来た駅周辺には、巨大なスーパーモールが建ち、学園住宅街が広がっている。

後援会会長は、入学式や卒業式に祝辞を述べるのも役割である。卒業式に臨んだ折、壇上の学部代表者四名のうち、女子学生が三名であることにまず驚いた。会場を見渡すと、晴れ着姿の女子卒業生が一際目立ち、華やかな光景だ。経済学部の女子卒業生が一名だった私の頃とは様変わり、今や半数になろうとしている。隔世の感ひとしおであったが、前途ある卒業生の門出を祝う気持ちで一杯になった。

日本では、人口大都市集中、特に東京一極集中を問題視されながらも、学業や就職等がきっかけで地方から都市へ人口移動が続いてきた。男性にその傾向が強く、女性は堅実に地元の国立大学を選ぶ傾向があるせいか、女子学生の割合が増えているようだ。

女性ならではの発想や創造力、現実在即した問題解決能力、真面目に根気よく取り組む姿勢。故に地元の企業にとっては、卒業後の女性の活躍を

## 地方の創生

大和証券グループ本社  
名誉顧問

原 良也

大いに期待するところだろう。子育てをしながら職場で活躍している女性も多くなった。地域企業の経営者が今では女性社長、と聞くことが多くなり、女性起業家も増えている。地方の創生は、女性の存在と活躍を通じて地域の魅力も広がり、果たされる気がする。貴重な人材集団の卒業生たちを、広く地域でどう活かしていくか。教育現場や学生自身が、どんなに考えても考え過ぎることのない課題だ。



国立大学法人となった大学の運営に目を向けると、国の財政事情からはほぼ毎年、運営交付金が削減され続けている一方で、大学は日本再興戦略である地域活性化の中核としてニーズに応じた人材育成、及び地域の課題解決機関として自立的改革も求められている。

実現には目標と努力、資金は不可欠であるが、交付金だけではとても賄えず、外部資金としての寄付金を頼りに改革を進めているのが現状である。この現状打開の一助になればとの思いで、後援会会長を引き受けた当時を振り返り、初心を問うているこの頃である。